

## 地中海古代都市の研究 (128)

## メッセネにおける古代劇場調査 2009 (1) 平面

正会員 ○吉武隆一\*<sup>1</sup> 伊藤重剛\*<sup>2</sup> 安井伸顕\*<sup>3</sup>  
岩田千穂\*<sup>3</sup> セイン・ソクンティール\*<sup>4</sup>

## 9. 建築歴史・意匠-4. 西洋建築史 建築歴史・意匠

## ギリシア メッセネ 劇場

## 1. はじめに

熊本大学ギリシア古代建築調査団(団長:伊藤重剛)は、2008年度よりギリシア古代都市メッセネにおいて劇場の建築調査を行っている。メッセネの劇場は、ギリシアの考古学者テメリス元教授が率いるメッセネ考古学協会が10年がかりで新たに発掘したもので、近年になってようやく全容が明らかになりつつある<sup>1)</sup>。熊本大学の調査団は、その建築担当として劇場の調査に取り組んできた。本年度は、2009年8月10日から9月15日までの約35日間、現地にて実測調査を行った。本稿では、前年度の調査成果<sup>2)</sup>をふまえ、新たに得られた知見を報告する。本稿では劇場平面の現状を報告した上で、平面の配置方法や手順について若干の考察を試みる。

劇場は、メッセネ市域の北西部に位置する。アゴラの北西隅から約34m西に自然の斜面を利用して作られている。アゴラとの間には舗装された坂道の街路を挟んでアルシノーエの泉が隣接する(図1)。劇場は、通常のギリシア・ローマ劇場と同じく、オルケストラ、客席、スケーネ、パラドスなどから構成されている。しかし、オルケストラに接する最下部を除いて座席部分の殆どが破壊された状態で出土し、現在は土砂がむき出しの状態となっており、建設当時の姿を想像するのがやや困難な状態である(写真1)。

劇場の建設時期を直接特定できる碑文や遺物は、未だ発見されていない。発掘者であるテメリス元教授によれば、およその建築的特徴と歴史的背景を考慮すると、紀元前3世紀ごろヘレニズム期に最初の劇場が建設され、紀元後1世紀ごろのローマ時代に再建され、紀元後2世紀ごろ再び改築されたらしい。

## 2. オルケストラ

オルケストラは、通常ギリシア時代のものは正円、ローマ時代のものは半円形である。メッセネのオルケストラは、ほぼ円形で、約4分1がスカエナエフロンズで切り取られている(図2)。オルケストラの縁石を結んで実測すると、その直径は約21.6mであった。エウリポス(オ

ルケストラの縁部にある水路または通路)まで含めると、その直径は約23.7mである。オルケストラの床面は、約20cm角の石板で舗装されていた。メッセネのアスクレピオス神域にある民会場のオルケストラと同じく、茶、白、灰などの色付きの石材を使用している。北側のやや東側には、2枚の石板を垂直に立て、上面に水平の石板を載せた祭壇が作られていた。オーケストラの外縁部は矩形の石で縁取られている。石材の幅はまちまちだが、約40cm程度で数メートルおきに、10~15cm角の穴の開いた正方形の石材を配置している。

オーケストラの縁石の外側は、幅約0.5mの水路すなわちエウリポスとなっている。水路中央のやや東側には、石をくりぬいて作った水瓶が置かれている。おそらく観客の飲料やその前のオーケストラ内部にある祭壇と共に、祭儀にも使われたのであろう。

このエウリポスと客席に伸びる階段には、矩形の石版が置かれ、オルケストラと客席を結ぶ導線となっている。この導線となる石版の間には、さらに別の石版が置かれていて、独立の貴賓席があった。現在は、西側の独立の貴賓席が2席だけ残っている。またエウリポスの上やその前後には彫刻の台座が置かれていて、現在は4基の彫刻台が残っている。そのうち2基には碑文が残されている(No.14564, 14565)。

座席部分は殆どが破壊された状態で出土し、座席そのものもオーケストラの周辺部を除いて原位置のものは殆ど残っていない。数百におよぶ座席用部材が劇場の内外から出土しており、ビザンチン時代に転用材として使うために破壊されてたらしい。オーケストラ周辺に残る階段の数は10本が数えられ、そのため座席は11の部分に分割されていた。座席そのものは厚さ約10cmの2枚の石板を垂直に立て、その上に水平の石板を載せたものである。座席下側の基礎部材はポロスであった。水路の後ろ側の部材ではポロスだが、モールディングが付いている。

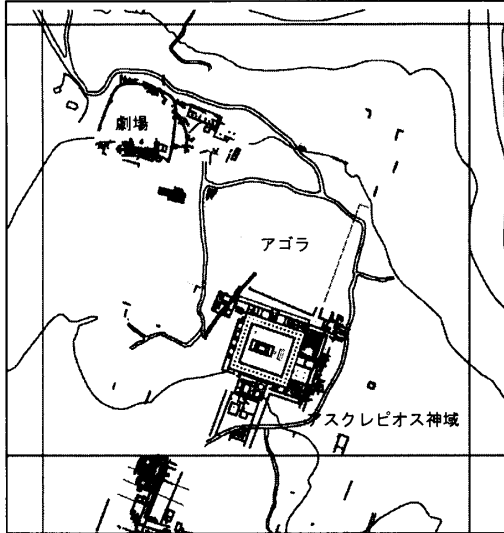


図1 メッセネ市域 (メッセネ考古学協会作成) 写真1 劇場航空写真 (メッセネ考古学協会撮影、2007年)

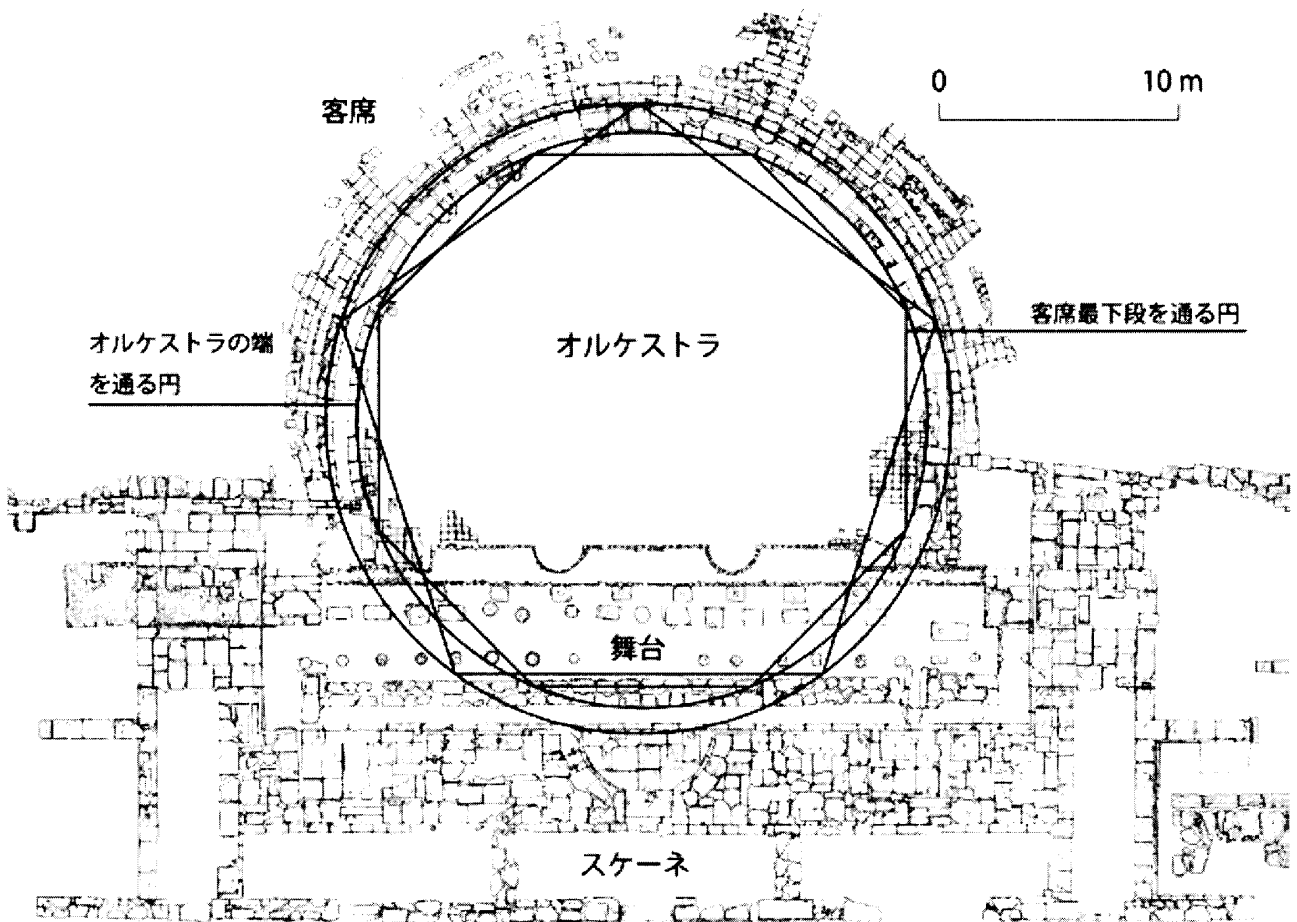


図2 オルケストラ平面図 (熊本大学ギリシア古代建築調査団作成)

### 3. スケーン

スケーンは、全体がコの字形をした劇場の舞台背景となる建物である。現在残っている遺構は、主にローマ時代のものである。オルケストラから見て中央正面にプロスケニオン、左右にオルケストラから舞台に上がる階段のあるパラスケニオンがあり、舞台の背後にはスカエナ

エ・フロンスがある。スケーンには3つのニッチがあり、正面が半円形のニッチ、左右が矩形のニッチとなっていて、背後の出入り口からポストスケニオンへ抜ける。現在の舞台は床が残っておらず、矩形の石や、ポロスの円柱が等間隔で並べてある。したがって、円柱を床柱として用い、その上に木製の床を敷いていたと思われる。円

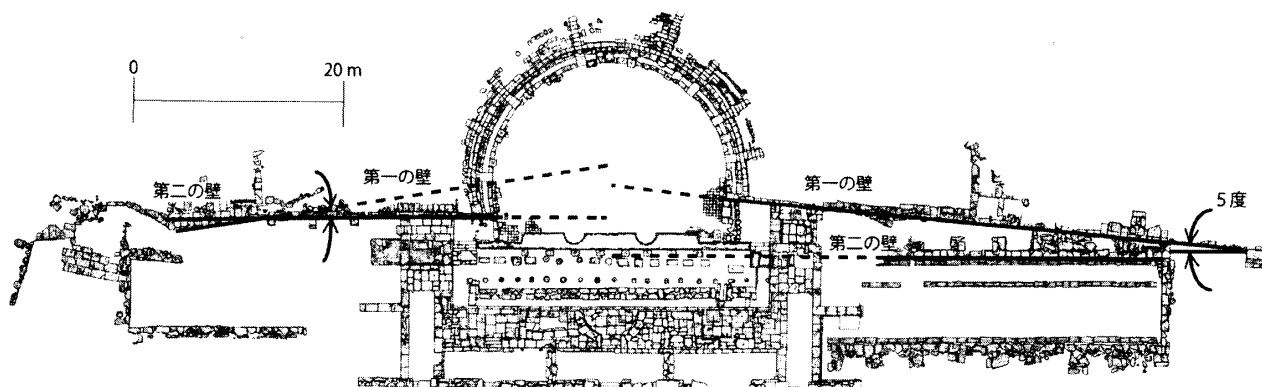


図3 パラドスの壁の位置関係

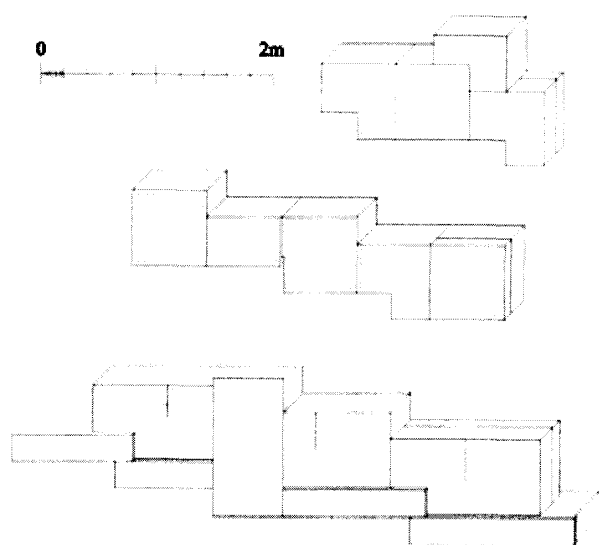


図4 西パラドス東側の石積み

柱の列とスケーネの間には、ポロスの石列があつて、ヘレニズム期のプロスケニオンまたはスケーネ前面の基礎と思われる。舞台の東と西の隅は、パラドスへ抜ける通路があり、一部は石敷きであつた。

#### 4. パラドス

パラドスは、ギリシア劇場では役者がオーケストラに登場する通路であり、通常その片側は巨大な客席を支える壁になる。メッセネのパラドスの壁は、少なくとも2回の建設過程の痕跡が見られる。

東パラドスにおいて最も内側にある第1の壁は、座席最下部から上部に向かってその痕跡がよく観察される。この壁は全てポロスで積まれた壁であり、中段部では大きく崩れた状態であるが、上部ではまたその痕跡が観察される。中段部は石材が列状に倒れた状態で出土している。壁の厚さは下部が0.45m、上部が1.20mであり、上部に行くにしたがって厚くなっている。この第1の壁は、オルケストラに対して平行ではなく、約5度傾いている。

現在最も外側の壁は、第2のパラドスの壁に相当するもので、第1のパラドスの壁の東側の一部を外側に増築する形で作られている。この壁は基礎が厚さ1.9mの石灰岩の石積みとして残っており、約長さ20m最大高さ3.5mある。石積みの層は45～52cmほどで高さが揃っている。

他方、西パラドスは東パラドスとは、石積みが大きくちがっており、また途中で設計変更がなされた痕が観察される。第1のパラドス壁は中央部南側に見られ、平面で見ると壁の線が、オーケストラ中央部にむかっている(図3)。しかしこの上にある第2のパラドスの壁はスケーネと平行で、第1の壁の線と約7度をなしており、明らかに建設途中での変更がなされたことが分かる。

第2のパラドス壁は、東側と、中央部及び西側上部にみられ、平面で見るとスケーネと平行に一直線をなしている(図3)。この壁には約4mおきに幅60cmのバットレスがつけられ、そのうちのひとつは第1の壁の上に乗っている。東側では、下部はポロスで、これに把手つきの薄いスラブ状の石材が階段状に配置され、その上に右上を切り込んだ石灰岩を載せている。東パラドスの整層積みとは全く異なる積み方である。上面で観察すると、この壁は厚さ0.52mで、2枚の石材を合せて縦使いにしている(図4)。接合部は縁に沿って幅のある接合面をなし、きれいなアナシーロシスの面が作られている。その内側にはポロスの荒い裏込石が積まれている。石材の表面と上面にアルファベットが刻まれて、積み方の順序を指定していたことが分かった。パラドスの東側ではやや複雑な石材の積み方になっているのに対し、中央付近から西側では、奥行き0.66m、厚さ0.27mの平石を整層積みとなっている。

西パラドスの壁とスケーネの間には、本来は東パラドスと同様に、2.15mの通路があつたが、再利用の石灰

岩を使って壁が作られて両側が狭められ、幅 0.8m の狭い通路に変えられている。

第一の壁は半円以上の角度を構成するが、付近ではこれに明確に対応する壁が見当たらない。これはおそらく最初はギリシア劇場として建設しながら、途中からローマ式に変更したためと思われる。

## 5. オルケストラとスケーネの位置関係

ウィトルウィウスは、劇場のオルケストラの平面を計画する際、円、三角形、四角形を用いて幾何学的に割り付けると述べている（第五書第七章）。すなわち、オルケストラとスケーネとの位置関係が、単純な幾何学的に配置されたと考えられる。渡辺氏が一連の研究<sup>3)</sup>で述べているとおり、ギリシア時代には幾何学の知識があったのだから、実際は三角形や四角形に限らず、いろいろな多角形が使われていたと考えられる。事実、現存する多くの劇場は、ウィトルウィウスの幾何学的配置になっていない。また、ウィトルウィウスの言うオルケストラの定義は厳密ではなく、オルケストラの縁までの円を指すのか、それともエウリポスを含む客席最下段までの円を指すのか不明確である。これらのことから、(1) オルケストラの縁までの円と、(2) エウリポスを含む客席最下段までの円の両方の可能性があるとして、それらの円とスケーネの位置関係をいくつかの多角形に置き換えられるか調べた。

その結果、メッセネの劇場においては、ヘレニズム期のオルケストラとスケーネは、オルケストラの縁までの円に内接する正八角形の一辺に配置されることが分かった（図2）。また、エウリポスを含む客席最下段までの円に内接する正五角形の一辺にも配置されうる。他方、ローマ時代のオルケストラとスケーネには、単純な幾何学的関係が見られなかった。

## 6. まとめ

一般にギリシアの劇場では座席の平面形状は、客席は半円より大きい角度をなし、両側のパロドスの壁を延長する線はオルケストラに向かう。これに対しローマの劇場では、客席は半円をなし、両側のパロドスの壁を結ぶ線は直線となる。巨視的に考えるならば、メッセネの劇場の建設順序について以下のことが言える。メッセネのパロドスは、ヘレニズム期の建設時は、当初は半円形より大きい角度をもつギリシア式の客席として造られた。その後、建設途中で変更され、スケーネと両側のパロ

ドスの壁が平行なローマ式の半円形の劇場として、建設が再開されたのであろう。あるいは、一度完成したギリシア式劇場の一部を改造してローマ式の半円形劇場にした可能性もある。ただし東パロドスにおいては、舞台収納庫が隣接して建つためにパロドスが使われなかった時期があると思われる。ローマ時代になって舞台収納室はその後破壊されたが、収納室の北側の壁は、そのまま東パロドスの壁に転用されたと考えられる。

しかし、西パロドスの第2の壁では、積み方が途中から変化しており、同じ壁でも建設時期が異なる可能性が高い。また、東西の第2の壁はいずれもスケーネと平行になっているが、一直線上に並ばない。東西の舞台収納庫も同様である。したがって、現時点では東西のパロドスが最低2回ずつの建設過程を経ていることは確かだが、東西の壁が一度に造られたと断定することはできない。

ヘレニズム期のオルケストラとスケーネについては、幾何学的な関係が見られた。逆にローマ時代においては幾何学的な配置関係は見られなかった。今後、オルケストラ、舞台建物、パロドスの三者の関係を見ながら、どういう順序で変更されたかを明らかにする必要がある。

## 謝辞

本研究は日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (S) 課題番号 20226012 による研究助成を受けた。記して謝意を表す。

## 注

1) 劇場の発掘については、発掘者による中間報告がある。Π. Θέμελης, «Το Θέατρο της Μεσσήνης Αρχαιολογική Τεκμηρίωση» Αθήνα 2008; «Αρχαία Μεσσήνη», Αθήνα 2002, σσ. 51-21. また以下の年次報告を参照。Π. Θέμελης, *Πρακτικά της εν Αθήναις Αρχαιολογικής Εταιρείας (ΠΑΕ) 1987-2006*. 建築遺構の保存修復の調査報告として以下の修士論文がある。Καράλη, Κ. Και Τζωρτζάκη, Μ., «Μελέτη – Πλάσιο για τη στερέωση και αναστήλωση του αρχαίου Θεάτρου Μεσσήνης» Ιουνίος 2008.

2) メッセネの劇場については、2008年度に以下の報告がある。谷皓司他、『地中海古代都市の研究(123) 古代都市メッセネにおける劇場調査報告 2008(1) 概要』日本建築学会九州支部研究報告(計画系)、沖繩、第48号、773-776頁。中之丸論志他、『地中海古代都市の研究(124) 古代都市メッセネにおける劇場調査報告 2008(2) 出土部材』日本建築学会九州支部研究報告(計画系)、沖繩、第28号、777-780頁。

3) 渡邊道治「ヘレニズム時代までのギリシアの劇場の舞台と客席との位置関係について」日本建築学会計画系論文集 第617号 2007年7月、187-194頁、ほか。

\* 1 熊本大学大学院先導機構 特任助教 工学(博士)  
\* 2 熊本大学大学院自然科学研究科 教授 工博  
\* 3 熊本大学大学院 大学院生  
\* 4 熊本大学工学部 学部生

Assistant Prof., Dr. Eng., Kumamoto University  
Prof., Dr. Eng., Kumamoto University  
Graduate Student, Kumamoto University  
Undergraduate Student, Kumamoto University